死 は 命 へ の 門

- ギルバート・ショー説教より-

DEATH THE GATEWAY T0 LIFE

Adapted from the teaching of GILBERT SHAW by Sister Edna Honica, SLG
Fairacres Pubication 15, 1971 (Sixth Inpression 1985), SLG PRESS
Convent of the Incarnation, Fairacres, Oxford

エドナ・モニカ修女編

トマス浅川敏 訳

本書はけやき文庫のため神愛修女会受肉修道院(フェアレイカーズ)の許可によって邦訳して 1989 年復活日に日本聖公会横浜教区で出版したものを、2012 年に訳者が所属する長坂聖マリヤ教会で電子化し、再版したものである。

は じ め に

「兄弟たちよ。眠っている人々については、無知でいてもらいたくない。望みを持たない外の人のように、あなたがたが悲しむことのないためである」(第 1 テサロニケ 4:13)。聖パウロが初代教会へ述べた復活におく信徒の望みについてのこの考えは、現代ではあまりにも簡単に忘れ去られてしまう真理です。死は人に直接立ち向うまで、人が目を向けるのを拒みがちな人生の一つの現実です。このことは聖パウロの明言「わたしは日々死んでいるのである」(第 1 コリント 15:31)と自信に満ちた断言「わたしにとっては、生きることはキリストであり、死ぬことは益である」(ピリピ 1:21)に対し全く反するものです。今はみもとに召された指導司祭ギルバート・ショー師が詳説し、展開し、私ども神愛修女会(Sisters of the Love of God)としての日常生活から詳細に亘って確信を持たせていただいたのは、実に聖書のこの重要な教義です。

以下述べる内容は当会の一修女が突然死に直面した際に、ショー師が行なった説教に主として基づいていますが、ショー師のことばは、いつ、どこにおいてもあてはまります。そして私たちが愛に生き、神を信頼し、自我に死に、更にシエナの聖カタリナと声を合わせて「神様の憐みによる愛は、神様の慈みのみ前で私たちを赦して下さるでしょう。」(対話 30 章)と唱えられるように促しています。

1971年　神愛修女会 エドナ・モニカ修女
フェアレイカーズ

この世は人の終わりならず、
神と人への愛をば学びめ、
神と人との為に愛の証しとなりて、
耐え忍びつつ、生きて、死ぬ
ところなればなり。

『愛の顔』ギルバート・ショー

信 頼

「主よ、わたしはあなたに信頼して、言います。『あなたはわたしの神である』と。わたしの時はあなたのみ手にあります」（詩篇 31:14,15）このことばは、すべての人、物事、境遇はその根源と成就が神に在るとして謙虚に見ることを通して学ぶ私たちの神に寄り頼む真心を表わしています。神から受ける存在を持つからこそ、その存在があるのであって、神の為でない存在、神に帰せられない存在はないのです。このことを理解するために私たちは知恵、感情、意志をキリストに差し出し、キリストに在って、神の御心(みこころ)を行なう一致に導かれる必要があるのです。この世は神のみ手にあります。わたしたちの生きる環境のすべて、健康、病気、何事も皆神のみ手にあるのです。私たちのものは皆神のものだからです。「私は裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな」（ヨブ 1:21）

私たちは人の死ぬ時やその様子はわかりませんが、ひとりひとりの人生の成就についての神の御心(みこころ)の範囲内に死が訪れることを信じてよいのです。神の御意だけを望むことは、神にすべてを完全に寄り頼むように時を合わせることです。キリストの人間性は父なる神の御意に御自身を完全にお任せすることによる復活の勝利へと収約されます。「あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください。」（マルコ 14:36）。私たちの人生は、帰するところ、キリストの人間性にゆき着くのであり、キリスト教の教えの目的は、私たち自身がキリストの愛がつつがなく流れる広々とした水路になるために、自己をキリストにお任せするのに妨げになる障害を私たちのうちにとどまらないようにすることです。

死に直面すると、私たちの愛および主にお任せする気持は、この世で最後の試練に会います。私たちがすなおに死に出会えるのは、私たちの生涯を通して、心を神の御意と一つにするならわしを育成して初めてできるのであり、他の時

に、神に愛をこめて「はい」といって、喜んでお任せする気持を完成するのと全く同じです。このことが私たちのならわしとなるなら、私たちは神の御意を安らかに受け止め、悲しみと苦痛が終わり、死を通して限りなき生命に導かれるまで辛抱強く待てるのです。

連 続 性

死という出来ごとは、その中で私たちのこの世における生命が完成され、すべての望みが皆成就されることをいうのです。「『わが顔をたずね求めよ』とあなたが仰せられた時、あなたにむかって、わたしの心は言います、『主よ、わたしはみ顔をたずね求めます』と」(詩篇 27:8)。この世に在る時が終わり、奇しき永遠だけが私たちの前に存在する時、私たちは待ち望んでいた顕示(しめし)に直面し、探し求めていた果実を得ることができます。「そのしもべたちは彼を礼拝し、御顔を仰ぎ見るのである」(黙示録 22:3〜4)。実際この世の生命は私たちのものであり、死が訪れる時、私たちの内には神の愛をさえぎるものは何もないように自己を捧げなければなりません。時折見のがされる死の奥義の様相は、連続性ということです。死は終わりではありません。いわば死は初めであり、さらには連続です。私たちが今まで行なったこと、現在行なっており、将来にも行なわれるすべてのことを永遠(とこしえ)へと持ち運ぶことをいうのです。

教会はこの世に生きている私たちで成り立っているばかりでなく、来世で生き永らえている人々によっても成り立っていることを私たちは忘れがちです。聖パウロは今ここで私たちはもう「聖徒たちと同じ国籍のものであり、神の家族なのである」(エペソ 2:19)といい、また私たちは次第に築き上げられ、天上の都、新しいエルサレムとなります。それは「私たちすべてのものの母」(ガラテヤ 4:26)です。この世の私たちは先んじた者と同じ国籍の者です。正に連続性があるのです。私たちは神で満たされている聖徒たちと同じ国籍の者です。

この連続性は、私たちが聖徒たちと共にあずかっているものであって、キリストと一つ生命であるということの初穂であります。主は神の憐れみをもって初めのアダムから最後の者までの全人間性をご自身のうちに取り入れて聖化されます。それゆえ、「彼らのためわたし自身を聖別いたします」(ヨハネ 17:19)と言うことがおできになるのです。キリストがなさった聖化の全生涯は、果てし

ない時間(ときま)を経て、果てしない空間を包みます。つまり天上の都との一致へとすすみ、すべてのものを、永遠(とこしえ)のうちにあって、神に全くこたえることができるように引き寄せるのです。私たちは神によって造られ、御霊をいただいているのでキリストに在りて自由に応えることができるのです。

聖パウロは「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである」(第２コリント 3:18)といい、私たちがキリストの姿を受けることについて語っています。

私たちの生命はキリストに一体となっているので、死は生命を終わらせることができません。私たちの生命は「キリストと共に神のうちに隠されている」(コロサイ 3:3)からであり、また「わたしたちのいのちなるキリストが現れる時には、わたしたちも、キリストと共に栄光のうちに現れる」(コロサイ 3:4)からです。

わたしたちが信経を唱えて、「死人のよみがえりを待ち望みます」と告白する時、この連続性を私たちは堅持していかなければなりません。このことばを唱える時、私たちは肉体と霊と魂の連続性を信じ、さらに、すべて神のためという一つの目的のために造られた一致に至ることを宣言するのです。したがって、この目的の証人として召され、また私たちの生涯を捧げることによって、限りなき生命に入るようにと召されているキリスト信徒として私たちは、この世の巡礼の終わりにお召しの声がかかっても、今まで共にいた巡礼の仲間を一人も失うことはないのです。

人間の死は、私たちが皆、個人として審判と、完成へと導かれる戸口です。「今から後、主によりて死ぬ死人はさいわいである」。御霊もいう、「彼らはその労苦を解かれて休み、そのわざは彼らについていく」(黙示録 14:13)。この“死人のわざ”はこの世の生涯で築き上げられたその人のすべてであり、死によって永遠へと導かれるのです。

しかし、戸口はつなぐ作用だけでなく、引き離す作用もします。それは、連続性の様相が真実であると同じく、死による真実の離別があることを意味しています。そして、この二つの真実は、いずれに偏ることなく、心に堅く留めておくように努めるべきです。やがて私たちの思いは肉体と魂の離別に至ります。

物質である肉体は宇宙のものであり、そのために肉体を埋葬する時、私たちは墓の傍らで「…土は土に、灰は灰に、塵は塵に…」と唱えるのです。肉体は塵から形づくられ、また塵に戻ります。しかしながら魂は、そのすべての記憶を伴いつつ、また神を覚え、神のために生きるように私たちを導く霊の力を通してこの世の生涯で得たすべてを伴いつつ、私たちの存在のすべてを持っており、また私たちの人格としての統一性を共に形成している意識と無意識の中に形成されたすべてを持っているのです。

死における喜びと確信

しかしながら、神を愛する者には死に際して、全く大きな喜びがあります。それゆえ、私たちのこの世の生命のあらゆる面を、変容して頂くために、神に差し出すことが如何に重要であるかということがこの点にあるのです。私たちの無意識の中に抑圧されているものが、肉体の力が尽き、意志の支配力が弱まるにつれて、出現するからです。人は時々、無意識の抑圧された自負心によって一生懸命に生きる権利に執着します。御意(みこころ)に従って神に仕える限り、私たちの生きるための闘いは正しいものです。しかし、神に召される時、キリストが父のみ手にご自身の魂をおゆだねになった(ルカ 23:46)と同じ方法で、私たちが自身を神に捧げることは私たちの喜びであります。

「この地上には、永遠の都はない。きたらんとする都こそ、わたしたちの求めているものである」(ヘブル 13:14)ということをキリスト信徒は知っています。この世の私たちの生命は死を通して到達できる一層充実した生命への準備段階に過ぎないことが、すべての新約聖書の使徒書簡の中で明らかです。死は通路に過ぎません。死の通路には恐怖の要素があり、死を自己の終局として、自己の得た全知識の喪失として、また大きな知らぬ世界への旅立ちとして神を知らぬ人々がはっきり自覚する恐怖があるのです。知らぬ世界のすばらしさと栄光は、私たちは経験していないので知ることができません。にもかかわらず、私たちには死が全く新しい生命に入る通路である確信があります。死によって私たちは巡礼の生涯から神の国の住民として全き世嗣ぎとなり、今「私たちは、土に属する形をとっている」が死を経て「天に属する形をとる」(第 1 コリント 15:49)に至るのです。

死、永遠（とこしえ）の証として

ヘブル人への手紙は、死についてさらに別の見方を教えてくれます。死は本質的に私たちの神への信仰の証の行ないであると強調しています「わたしたちの参加すべき競争を、耐え忍んで走り、信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか」とその手紙は勧め、倦むことがないように私たちに「罪と取り組んで戦う時、まだ血を流すほどの抵抗をしたことがない」(ヘブル 12:1 以下)ことを覚えさせてくれます。さらにまた第 10 章では、私たちに先立ち、私たちを励まし、すでに同じ天国の住人である聖徒、すなわち“雲のごとき証人たち”にっいて述べています。

従って、死の中に、殉教者たちの場所があるのです。彼等は永遠に対する証人、神に対する全き応答の証人として生命を捧げました。いわゆる“白い殉教者”にもその役割があります。それは、信仰のために肉体の死へと召されるものではなく、生きている間にキリスト教徒であるゆえの困難にあずかって行なうあかしです (第 1 ペテロ 5:8〜11)。いかなる心の苦難であろうと、肉体の苦難であろうと、すべて忠実に苦難に耐えることは、創造における神への反逆によって起ったことへの継続的な克服の一部をなすものです。「ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある。またわたしは、天からの声がこう言うのを聞いた。「書きしるせ、『主にあって死ぬ死人はさいわいである』」と。」(黙示録 14:12,13)。

三つの死にかた

聖書の中に三種類の死が見分けられます。まず“この世の死”であって、魂と霊を肉体から引き離すことであり、このことについて私たちも詩篇の作者と共に「だれか生きて死を見ず」(詩篇 89:48)と問いかけます。さらに人は朽ちないものを求める者として造られたので、ヨブの叫びは私たちの心の中に大きな共鳴を呼び、私たちはヨブの嘆きを分かち合うのです。…「女から生れる人は日が短く、悩みに満ちている。…人は死ねば消えうせる。息が絶えれば、どこにおるか。」(ヨブ 14:1,10)

次に、意識して犯す罪により、神から魂も肉体も共に引き離される“霊の死”があります。ザカリヤが彼の洗礼者ヨハネについての預言の中に救いを予見するのは先ず何よりもこのような霊の死からの救いです。

「あなたは、いと高き者の預言者と呼ばれるであろう。
主のみまえに先立って行き、その道を備え、
罪のゆるしによる救いを
その民に知らせるのであるから。
これは私たちの神のあわれみ深いみこころによる。
また、そのあわれみによって、日の光が上から
私たちに臨み、暗黒と死の陰とに住む者を照し…」

(ルカ 1:76～79)

さらに、ヨハネ黙示録 20 章はもう一つの死について教えています。つまり“第二の死”であって、人が霊肉とも全人格として永遠に神のみ前から引き離されることをいいます。人間には、自分自身の選択によって、あるいは、多分利己的な自我に仕えるよりむしろ神に仕えるという明確な選択をし損なうことによって、自分が神によって創造され生れ出る際に決めちれた神との永遠の一致が失われる可能性があります。この可能性が持つ真実さを 20 世紀の人々が熟慮するなら、良い結果になるでしょう。この世の生活が地上のみのことが目的となり、自我を喜ばすことにのみ過ごされるなら、死の際に残るものは、心と記憶の中で果てしなく空転するこの欲望、または神から引き離されたという自己の挫折の中でよみがえるあの欲望だけになるのです。

死の勝利者 キリスト

ユダヤ人たちは神の本質をますます体験して、神の義が終りに現われるものと認識するようになり、キリスト以前数百年の間に多くの人は死人の復活を信じるに至りました。例えばマルタはラザロのことを確信して、「終りの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています」と言い得たのです。神自身の行為だけが終りの日を早めることができ、神はそれを早められたのです。これがキリスト教の“よきおとずれ”です。 「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない」(ヨハネ 11:2 4～26)と主イエスは言われます。

肉体は罪のゆえに死をまぬかれることができません。「ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいって来たように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである」(ローマ 5:12)。しかし主によって全く明確な通り、肉体は死によってとらえられたままではいません。これは教会によって述べ伝えられているよきおとずれです。「もし、ひ

とりの罪過によって、そのひとりをとおして死が支配するに至ったとすれば、まして、あふれるばかりの恵みと義の賜物とを受けている者たちは、ひとりのイエス・キリストをとおし、いのちにあって、さらに力強く支配するばかりではないか」(ローマ 5: 17)。この世で与えられた神の憐れみを通し、神のみ恵みによって死者の初穂であるキリストの永遠の生命に入るのです。キリストは死を超越しておられました。キリストがこの世で背負っておられた肉体は、キリスト自身の中で死を通し、死を越えて生命の奥義に変えられたのです。従って「もしわたしたちが、彼に結びついてその死の様にひとしくなるなら、さらに、彼の復活の様にもひとしくなるであろう」(ローマ 6:5)。「わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である。そして、死と黄泉とのかぎを持っている」(黙示録 1:18)、栄光あるキリストの勝利のことばです。救い主イエス・キリストは「死を滅ぼし、福音によっていのちと不死とを明らかに示されたのである」(第 2 テモテ 1:10)。「死の苦しみのゆえに、栄光とほまれとを冠として与えられたのを見る。それは、彼が神の恵みによって、すべての人のために死を味わわれるためであった」(ヘブル 2:9)。私たちのためにイエスはこの世の死を味わわれたのです。十字架につけられたキリストの不可思議な、恐ろしい叫び、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マルコ 15:34)からして、私たちの罪を負い(第 2 コリント 5:21)、キリストはご自身心の中で、神のいのちから引き離される霊の死め苦しみを知っておられたと思われるのです。いずれにしても「キリストは死人の中からよみがえらされて、もはや死ぬことがなく、死はもはや彼を支配しないことを、知っているからである。なぜなら、キリストが死んだのは、ただ一度罪に対して死んだのであり、キリストが生きるのは、神に生きるのだから」(ローマ 6:9,10)であり、また「死んだことはあるが生き返った者が、次のように言われる。…　死に至るまで忠実であれ。そうすれば、いのちの冠を与えよう。勝利を得る者は、第二の死によって滅ぼされることはない」(黙示録 2:8,10,11)からです。

死者のための祈り

この堅い信仰により、教会は初代から死者のための祈りを捧げてきました。この祈りは信仰からだけではなく、生きている者の願いと永遠の愛からも生じる働きです。愛には終わりがありません、「神は愛である」(第 1 ヨハネ 4:8)からです。したがって私たちの愛は不滅の捧げ物として死んだ者と共に永らえ、私たちへのその死者の愛も永らえ、死者がより完全にイエスとの交わりのうちへ呼び寄せられるに従ってその愛は姿が変えられてゆきます。

死者への私たちの記憶が完全に自由なものにされるために特に祈りを捧げなければなりません。記憶は私たちの一部に余りにもなり切っており、捨てるのが困難だからです。私たちは「安らかに眠りが与えられますように」と祈ります。その“安らか”は愛の働きであり、自己を引き離すことではなく、神の臨在と御旨を受け、またお返しすることです。死者への私たちの祈りは、自己を捧げて豊かな愛を生むにつれて効果を高めます。神聖さ(sanctity)とは神の働き、愛の活動であり、神が被造物にそれができるようにと創造された愛の応答を引き出すために、その被造物にくまなく注がれた神の愛なのです。したがって被造物である人間は、神のお働きを自由意志によって受けまた応えて、創造の御意(みこころ)である＜愛し、さらに愛を増し加えることに＞において全きものとなるように造られたのです。

聖オーガスチンがまさしく言っています。「あなたは、あなたのために私たちを造り、私たちの心は、あなたにおいて休息を見出すまで安らかではありません」と。ですから私たちは「世を去りし者を安らかに憩わせて下さい」と祈り、人生の目的を果たした後の休息に入れますように、ご自身のために万人をお造りになった創造の神のうちに休めますようにと祈ります。

“この世の死”は肉体から魂を引き離すだけであって、必ずしも魂を休息させるのではありません。魂が時代やこの世界に左右されたり、もつれ合い拘束されるなら、休息は得られず、挫折と離別と暗闇を味わうに過ぎません。魂がそのまますっかり神の御意にとび込み、たどって来た過去をこの世の雑事とともに完全に捨てて行けるなら死はすばらしいことです。肉体の生命が神に応えるという真の目的を見つけるよう成就されるために、私たちが自我に死ぬなら、死は生命への門であります。したがって死者が清い顔をもって直接に神の憐れみのみ業を知ることができるように、また神の憐れみを受けると同じように審判をも受け入れることができるようにと祈りを捧げます。

「主にあって死ぬ者は幸いである」

キリスト信者であることはなんてすばらしいことでしょう。私たちは召され、この世での仕事を終える時、収穫者なる神に寄り頼み休息に導かれ、休息のほか何もない全きー致の中へと導かれることを堅く待ち望みます。神の御意がその時、私たちの中に完全に成就されるのです。キリストを信じて死に至る者は本当に幸いです。天国で刈り取られるために死者はすでにこの世で行い始めた、聖められた初穂を携えて行くからです。私たちは先に天国へ行った死者の働きを引き継ぎます。死者は穂を携えて行き、私たちは死者が耕した畑を受け継いで働き続けなければなりません。私たちは死者が残した仕事を続けるのです。死者の働きへ私たちの働きを加え、そうすることによって私たちはこの世のものでなくて、この世から収穫を得ている天国を耕しているのです。

> その時、御座から声が出て言った、「すべての神の僕たちよ、神をおそれる者たちよ。小さき者も、大いなる者も、共に、われらの神を賛美せよ」。「全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる。わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである。彼女は、光り輝く、汚れのない麻布の衣を着ることを許された。この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行ないである」
>
> (黙示録 19:5〜8)

私たちの一人ひとりは、キリストがすべてのものの終わりに天の都の栄光へとお導きになる花嫁の栄光のために役立つよう、花嫁を飾る麻布の糸を作る役割を果たしているのです。天の都には偽りをなすものはなく、どんなゆがみもありません。また罪ある人間の本質から来る雑事が皆主の受難において聖められるために、魂が自我をすべて捧げることによって洗い清められます。これこそ信徒としてすばらしい事です。

このすばらしい事に直面する時、私たちは、聖パウロがコリントへの第二の手紙の中で「このような任務に、だれが耐え得ようか」(第２コリント 2:16)と問いかけたように尋ねてもよいのです。私たちは「力が自分にある、と言うのではありません。わたしたちのこうした力は、神からきている」(第２コリント 3:5)ことをわきまえています。というのは初めから終わりまで神の働きだからです。聖パウロは、神は信徒の中に働くと確信すると共に、私たちの序答と協働が極めて重要であると気づいていました。私たちは「神と共に働く者」(第２コリント 6:1)であり、また「わたしたちは皆、キリストのさばきの座の前にあらわれ、

善であれ悪であれ、自分の行ったことに応じて、それぞれ報いを受けねばならないからであ」ります(第２コリント 5:10)。

夕ぐれに彼らはあなたを愛のうちに試すであろう

死は深遠な奥義です。死後魂に何が起るかを考究するに従って、私たちは、無限であり、私たちの全理解力と知識を越えた事柄に関して私たちの有限な心の限界を認識しなければなりません。この問題について私たちに最も明快に語りかけてくれた聖人の一人にジェノアの聖カタリナがあります。聖カタリナは『煉獄について』という書物の中で、死者はこの世で身につけてきた意志はもう変えないであろう。人の魂はこの世の生涯で意図をもった意志によって、善悪に拘らず定着しているからである(4 章)といっています。さらに、魂はその罪の性質だけに導かれて定められたところへ行く (7 章)と言っています。

この表現には、「滅び行く古き人を脱ぎ捨て」(エペソ 4: 22)といって私たちを戒める聖パウロの言葉の響きがあるように思われます。この文脈で聖パウロは、神に反逆するものとしての、罪ある人類を表わすために、human nature(人間性)という語を使っています。このような“反逆”は必然的に魂を神から引き離します。そして死の際に魂は、いわば「自らその重みで沈む」のです。魂のならわしと神か自我かの選択は、この世の生活によって明らかに築き上げ、形成されてきたからです。

十字架の聖ヨハネは私たちに「夕ぐれに彼らはあなたを愛のうちに試すであろう」と言います。(金言 57)。ジェノアの聖カタリナは、さきの書物の中でこの試みの効果にふれて次のように言っています。魂が神にこのような愛の焔の力で引き寄せられるのを自覚すると、崇高な主なる神への光り輝く菱の熱によって魂が溶け、溢れ出るのを感じるのです。煉獄で感じる苦しみを魂の中に生じさせるのはこれらの情景です。(9 章)

ニューマンは『ゲロンチウスの夢』の中でこの考えを展開しています。悪魔に引き渡されたとき、魂は肉体から引き離された現在の状態について尋ねて言います。罪の浄化を受ける前に一度だけ神にまみえることができるとの教えによって、私はこの世ではいつも慰められていたと。天使が答えます。

> 真に - ひととき主にまみえん。
> いと聖き方のみ姿は

汝に喜びを与え、或は突き刺さん。
永久の愛、焔と燃えて、
姿変わるまで、燃え続かん

晩年に私たちは神の愛によって裁かれます。魂が神の愛の、大きな引きつけられる力も、引き寄せる力もともに感知するにつれて、同時に魂が自らの罪が神の愛に反するもの、神の愛のみ前には全く存在し得ないものとして自覚するにつれて、御使たちは魂に近づく苦痛 - 神の愛に出会うときの苦痛を歌います。

かくてこの二つの苦しみは互いに反し、いと鋭く、
神見ぬ前の憧憬は、
神見んと思う自我の恥らいは、
汝のまことの、いと鋭き煉獄とならん。

それにもかかわらず、魂は比類のない力で主の足もとに引き寄せられて御使のみ手より突進し、御使はその様を歌うのです。

幸せな、悩める魂よ、汝安からん、
尽くれども、神のひと目になお生きつづけて。

魂がキリストにまみえ、「わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」(マタイ 9:13)とのキリストの憐みを感じとる時、潔めが始まるのです。神の愛は、罪人がすべての被造物は神のものであると認める時に現われます。しかし自ら進んで憐みを受けなければなりません。自ら進んで憐みを受けないなら罪の恐怖と死への戦慄が残るだけであり、魂は盲目となり、働かなくなるからです。

したがって私たちは、全自我を働かせて目を開き、「わたしがきたのは、この世をさばくためでなく、この世を救うためである」、また「わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう。(ヨハネ 12:47,32)と死の前に言われたキリストの中に神の憐みを感知するよう、霊的生活を確立しなければなりません。私たち自身の中で神のためでないものは、永久に存在できません。神のものが一致に入れるためには、神のものでないものはすべて焼き捨てられなければなりません。焼き捨てられず、神のものでないものは、すべてそのために備えられたところへ行くのです。

結 び

主は神の憐みを、いなくなった羊、なくした銀貨、放蕩息子のたとえで教えて下さいます。どのたとえも要旨は「罪人がひとりでも悔い改めるなら、神の御使たちの前でよろこびがあるであろう」(ルカ 15:10)ということです。私たちはこの天上の神の喜びに貢献できるように悔い改め、神に寄り頼んで生きなければなりません。主は、キリストに在る者からは誰も取り上げることのできない喜びを知ることができるために、主ご自身の犠牲の死が必要であることを弟子たちにお教えになりました。(ヨハネ 16:19〜22 参照)。忠実な僕には主人と一緒に主人の喜びにあずかることが約束されているのです(マタイ 25:21)。聖パウロはテザロニケ人たちに、罪のあがないは永久に変わらないものであることを教え励まし、喜ぶように命じます。なぜなら神はテサロニケ人たちが喜べるように働いておられるからです。私たちは恐ろしい審判を受けるのではありません。主イエス・キリストを通して救いが完全に達成されるように神が定めておられます。したがって「すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられること」(第 1 テサロニケ 5:18)なのです。

このような喜びの霊にひたり、神の勝利にみちた愛におく確信によって、私たちは真実に次の祈りの言葉のうちに満ち満ちた平安と喜びを見出すことが出来るのです。

世を去ったすべての人の魂が
主のあわれみによって
安らかに憩うことができますように。

アーメン